
SHADOW

水無川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H A D O W

【Nコード】

N O 1 1 3 W

【作者名】

水無川

【あらすじ】

戦争でネスという少女は家を失い、カースル王国に移り住むことになる。

彼女を待ち受けていたのは沢山の出会いだった。ある日、雪の中で負傷している男を助けた。しかし、彼は声が出なくて……。*上げ直しました。

01 開演

第14次世界大戦。——それは今までの戦争より最悪な戦争であった。

発端はジウ王国のまだ生後間もない王子が暗殺されたことにより起こったものだ。

それを影から見ていた反王族組織がこれを機に戦争を初めてしまった。

急な戦争に敗北したジウ王国は反王族組織に王族関係者を処刑され終戦となった。

だが戦争の傷跡は決して浅いものではなかった。

家を失った人々は近隣の被害の少ない国に移動することを余儀なくされた。

ネスは人々の行列の中を枯葉を踏む音を聞きながら歩いていた。

肌寒いが丈が長い土色のコートを羽織っていたのでそこまで寒くない。

い。

それに腰まである癖のある黒髪がマフラー替わりをしていていた。足元ばかりを注意していたので気晴らしに顔をあげてみる。

「だいぶ城壁が見えるところまで来たんだ……」

虚ろな目で大きく頑丈そうな城壁を見つめた。

それは彼女にとってまるで牢獄のように見えた。

城壁の外にいるやつれた顔をした5人の門番は入国する人の名前や性別、健康状態、前にやっていた職業などを紙に記入していた。

ていた。

だいぶ疲労しているのがうかがえる。目の下の隈がなによりの証拠だ。

一人の若い栗色の髪をした門番の目がネスをとらえた。

「カースル王国にようこそ。入国手続きをする。名前と性別は？」

「ネ……エルネスタです。性別は女」

名前が長いのであんまり好きではない。

そんなことは気にせずに若い門番は機械的に素早く紙に記入し質問を続ける。

「健康状態と前の職業は？」

「元気です。前の職業は農業をしていました」

門番はチラリと横目で私の顔を見て木で出来た札を差し出した。

「城の西側の大広間が解放してあるので今日はそこで泊まっていくといい」

素っ気なく門番はそれだけを言うとなスから目を離れた。

とりあえず何もすることがないので門番が指示したところに行ってみることにする。

一応、鞆の中に必要最低限の衣類と毛布と缶詰、サバイバルナイフ、そして財布が入っている。

財布の中には金貨が20枚に銀貨が5枚、銅貨が10枚入っている。上手く行けば半年は暮らせるはずだ。

正直、今後の生活の不安は感じていなかった。
いや、実感がしないというのが正しいかもしれない。

門をくぐると戦争の跡がいやでも目に入る。

やはり近隣国でも所々、建物が崩れていたり焼死体があったり、無造作な墓が作られていた。

焦げた異臭が鼻につく。なるべくそれらを見ないように道を進んだ。

中心部に来ると日常的な風景が流れていた。

とても平和そう近くで戦争があつたとは思えないほどだ。

一部の人々が苦しい思いをしているのにすぐ目の前では楽しそうに生きている。

たしかに彼らは決して悪くない。だが……。

己の手を強く握った。さっき貰った札が手に食い込む。多少、手が切れたが痛みは感じなかった。

悶々と考えているうちに門番が言っていた城にたどり着いた。

気分はまだ晴れない中、城門の門番に札を見せるように言われたので手に握ったままの札を見せた。

門番は快くよく通してくれた。

中に入ると目の前に大広間があり手当てを受けている人や寝込んでいる人、左側の長テーブルには今後についての相談をし

ている人などがいた。

右側には食べ物と毛布の無料配布をしていたので早速貰いに行った。

食べ物はここの伝統料理なのか見たこと無いものだった。

野菜で肉を包み込み、ガーリックの程よくきいたスープに浸かっていた。

『美味しい…』

料理に舌つつみ出来る時間があることに驚きながら完食する。

まだ外はうつすら明るいが体が疲れているので寝ることにした。
壁によりかかり薄い毛布と持っていた毛布を重ねて包まる。

すぐにふわふわと身体が浮く感覚が全身に廻った。

——そして、久しぶりに夢をみた。

深い森の中。空には赤い満月が浮かんでいる。鳥や虫の鳴き声は一切聞こえない。

聞こえるのは自分の鼓動のみ。

どつくん…どつくん…

何故だか暗くて悲しくて寂しくて……訳のわからない感情にかられた。

——後ろから何か迫り来ている。

立ち止まり振り返させてくれることを許してくれない。

怖くなって走り出す。

だが、後ろから無数の手が捕えようとしてくる。

そしてついに一つの手が長い黒髪をつかんだ。

ああ、死ぬんだ。消えるんだ。

——そう思った時……

目が覚めた。

「……っ！……！」

勢いよく後ろの壁に大きな音をたてて頭を打ってしまった。

両手で頭をさする。結構痛い。

大きな窓から朝日が目に入った。今日はきっと晴れるだろうなとぼんやりと思った。

周りの人を見たが起きているのは数人で後は寝ていた。

とりあえず、何をすべきか考えてみる。

これからの仕事を探すか家を探すか。

いつまでも城に留まっていたら気が休まない。

今はお金があるので家を探すことにした。

「この家なら譲ることはできるけど……」

あれから家を探して3日。

やっとマシな家を見つけた。その間、城に世話になったことはいうまでもない。

「え？何か問題でもあるのですか？」

目の前にある家を紹介してくれた中年の女性に質問をした。

どうも言いたくないらしい。

だが彼女をじっと見つめると折れたのかやっと口を開いた。

「……ここは一応、国外になっているの。例え誰かに物を盗まれたり殺されたりしても訴えることができないということ。

……つまり国外では法で裁くことができないの。……それさえ受け入れてくれれば私だって喜んで売らせていたたくわ」

だが彼女の言葉はネスの耳に入っていなかった。

なぜなら家のことで頭がいっぱいだった。

『二階と庭がついていてそれでもって金貨2枚!』

頭の中の計算機がフルで動く。

「構いません!ぜひ売ってください!」

女性は少し困った顔をして言った。

「分かったわ。……何かあったら私にすぐに相談するのよ」

そう言って家の権利書と古風な家の鍵を渡してくれた。そして彼女にお金を渡した。

「それじゃ、私はこれから用事があるからこれでね」

女性は心配そうに手を振りながら城壁の中へと消えた。

さっき貰った鍵を使って家の中に入る。

ボロそうに見えたが外見だけで中はそうでもなかった。
一階にはリビングと台所、トイレ。二階には寝室と倉庫部屋があった。

どこも埃が積もっていて掃除さえすれば大丈夫そうだ。

そして何より玄関から入って一番に目についたのは大きな暖炉である。

古風でとても味が出ている暖炉だ。これも掃除すれば使えるだろう。

家が見つかり心が落ち着いた。

それからというものの食事と睡眠は城ですませて、それ以外はずっと家の掃除をしていた。

そのおかげで見違えるようにきれいになっていた。

部屋の隅にあるホウキや雑巾がまるで十年ぐらい愛用していたように見える。

今日からやつと本格的に住める喜びに胸を踊らせた。

不意に窓を見ると外はすでに暗くなって、ちらほらと雪が降っていた。

「もうこんな季節なんだ……」

色んなことが多すぎて季節のことなんか気にもとめなかった。
いや、気にとめる暇がなかった。

本格的に暗くなる前にランプに火をつけていく。

食事はすでに城の方で配布してくれたのですませた。

ソファに座り今後のことを考えていた。

無論、仕事についてのことだ。

でも何が出来るか自分自身でもわからない。

今まで農作業しかやったことがないのだ。

農作業をやるにあたって広範囲の土地が必ず必要で他にも色々と準備がある。

考えてもわからない。

仕方がないから明日、私が出来そうな仕事をしらみ潰しに聞いてみるしかない。

できるだけ早く職につくことを心に決めた。

昼下がりに城に行き、入って左側にある【相談室】で話を聞いてもらった。

話を聞いた中で農作業はあまりお勧めではないらしい。

「この際、なんでも良いんで何か仕事はないのですか」

目の前にいる年老いた男性に懇願の瞳を送る。

「うーん……」

そう言つて男性は束ねてある書類をめくり始めた。

額にしわがよっている。多分、癖なんだと心の中で思った。男性が口を開く。

「使用人はどうかの？」

「え？」

気が抜けた声が思わず出てしまった。

そもそも使用人なんてやったことがない。

「嫌かもしれんが使用人が一番いいかもしれんな……」

「いつの時世に……?」

私は直ぐ様、疑問をぶつけた。

「まあ、金持ちじゃなくても腰が悪いワシみたいな老人が頼むこともあるんじゃない。もちろん、金持ちだって頼むこともある

じゃが」

なるほど……と思った。

体が思うように動かない人の世話やちょっとした手伝いをしたりする仕事……

つまり専属の介護みたいなようなものだ。

そこまで悪くないと思うし、とりあえず今はこの仕事にしておいてまた今度、良い職を見つけたら辞めればいい。

「……分かりました」

書類にサインを書いた。

「そういえばお嬢ちゃん、仮面舞踏会に出るのかね？」

老人は書類の不備がないかを確認しながら言った。

彼が言った仮面舞踏会についての張り紙が至るところで見たことを覚えている。

この国の王——クレイグ・ブラック主催の舞踏会である。

参加条件として皆、仮面の着用が義務付けられているのが特徴で仮マ面スカレード舞踏会と呼ばれるようになったらし

い。

しかし何故、仮面なんか着けなければならぬのか分からない。

「いいえ、参加しません」

きっぱりとそう言った。そもそもドレスなんか持ってない。第一に……。

「確かにこんな時にやるのはどうかと思うけどのう」

まるで心を読むように言い男性は鼻で笑った。

「手続きは完了したから直ぐに職につけるからの」

そつですかと軽く流して椅子から立ち上がり男性に感謝の言葉を告

げると私はその場を離れた。

——その晩また夢を見た。

前に見た夢とは正反対で青々とした木の隙間から光が漏れていて心地好くずっとそこに居たくなった。

五メートルぐらい離れたところに美しい見たことのない花がある。

それに近付こうとしたけど動けない。

足に何がついている。

——足枷だ。

歪な鎖は森の中に続いていて異様な雰囲気を出していた。

必死に足枷を解こうとするが外せない。

木の影に二つの赤色の光がこっちに近付いてくる。

——足が震えて立てない。

そして覚悟を決めたとき……

——目が覚めた。

窓の外は銀色の世界が広がっていた。

「積もってる……」

数日前から降っていて雪がシルクのベッドみたいになっていた。

寒いので肩にブランケットをかけて玄関に投げ込まれた郵便物と横に積んである薪を抱えてリビングに戻る。

薪を暖炉の中に積んで火をつけた。

暖炉の火を使い、湯を沸かし、紅茶を入れる。

古ぼけた赤いソファの椅子に座り、蟬封している封筒を開けた。

刻印は多分、この王国のだろう。

初めてここに来た時に城壁に描かれていたのを覚えている。

それは仕事についてだった。雇い先が決まったらしい。
以外にも早く決まったので驚いた。

カップを傾け口に紅茶を流し込む。暖かい液体が体を暖かくする。
変な緊張を紅茶が溶かしてくれた気がした。

内容は大体予想していたものばかり書かれていた。

さらさらと読んでゆく。

一番後に雇い主と雇い先が書かれていた。

——【クレイグ・ブラック / カースル城】

「……っは!？」

あと少しで口に含んだ紅茶を吹き出しそうになった。いきなり雇い主が王なのだ。

確かに仮面舞踏会の準備をするために使用人が必要かもしれない。

やはり、ロクなことにはならないな、と思いつつ封筒を適当にテーブルの上に置き朝食を作るために台所に向かった。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

02 沈黙の雪

それは太陽が真上にきたときだった。

ちらほらと優しく雪が降るなかサクサクという雪を踏む音が森の中で響く。

その音はテンポが遅くよろよろとしていた。

ネスは両手いっぱいに食料品を抱えていた。そして薬も幾つか抱えて。

古風な鍵を取り出し家のドアを開けた。

なるべく大きな音がしないように注意をする。

台所に食料品を置き、二階にある自分の部屋へ薬と白湯を持って行った。

そしてネスのベッドの上に寝ている見知らぬ男の隣にあるサイドテーブルに薬と白湯を置いた。

早朝、いつも通りに朝を過ごし、買い物をするために市場に行こうとする。

家から市場までは割と近いところにある。

積もっていた雪を踏みながら道を進んで行った。

そろそろ、城壁の門が見えようとしていたときに不意に視界の端に黒い何かが落ちていたのが見えた。

熊が何かの動物の死体に見えた。

もし、それだと狼などの肉食動物が死肉を食べに来てしまう。

それが餌となってしまう自分自身まで襲われ兼ねない。

気は進まないがそれが何なのかを確認するため警戒しながら近づく。

それを見た瞬間に顔が青ざめ鳥肌が立った。

——男の人間だった。

恐る恐る頬に触れてみる。肌はとても冷たく氷のようだ。

脈を診た。とても弱弱しかった。

『なんでこんなところで倒れているの……？』

とりあえず、うつ伏せになっているので体を仰向けにする。

彼の体を見た瞬間ぎよっとした。

肩と腹部と足に大きな傷を負っていた。それに擦り傷がとても多い。

——それはまるで戦争に行った兵士のようなだ。

迷った。

もし、反王族組織やそういう関連の仕事をしている人を匿ったらどうなるか分からない。

運が悪ければ傷だらけの男に殺されるか国から追われて処刑されるかのどちらかだ。

しかもやっと生活が落ち着いたときであった。

この生活を手放したくない。

『彼は人間。ただの人間』

そう自分に言い聞かせ男の腕を肩にかけもう片方の手で男のベルトを掴み家まで引きずった。

結構時間がかかったがやつのことで家のベッドまで運んだ。

身長は自分より明らかに大きく、推測だが歳は自分より7、8歳年上。

銀色の髪をしている。服装は兵士にしては軽装でそもそも兵士っぽくない。

もしかしたら一般市民で私たちと同じような人かもしれない。

もう考えるのは止めた。

今は彼の命を助けることが先決だ。

今更、家の外に放置なんてしておけない。黙っていればいい。

家に戻り、すぐに寝室にある小さな暖炉に火を焚いた。

服を脱がせ暖かいお湯につけたタオルで血をふき取り、傷口に気休めだが包帯を巻く。

この家の倉庫部屋にあった男性用の服を取りあえず着せた。

着ていた血まみれになっていた服は洗濯籠に入れた。

見知らぬ男は気を失っているのか目覚める気配がしなかった。

その隙に包帯を使い切ったので買いに行くことにした。

ついでに彼が起きたら体が弱っているので何か食べ物を食べさせなければいけない。

食料品も買いに行くことにした。

家に帰って来ても彼はそのままでまさか死んだのかと思い、確認をすると小さく呼吸をしていた。

左胸に耳を当てると小さな鼓動が聞こえた。少しほっとした。

顔を上げるといつの間にか起きていたのか彼がこっちを見ていた。

目が合い、体が動かせない。

これこそ蛇に睨まれた蛙ということか、と身をもって体感した。

「……………おっ、おはようございます」

彼は眉間に皺をよせ、ゆっくりと首をふる。

「……………」

その行動の意味が分からず首をかしげた。

何か悪いことをしたのだろうか。

ネスは彼の顔を恐る恐る見た。

彼は凍傷となつて包帯で巻いてある左手で自分の喉に手を触れた。

「……声が出ない？」

彼は無表情で頷いた。

ふーと小さく息を吐く。

「そうなんですか…あ、薬を飲んで下さい」

ネスは彼に薬を渡した。

だが彼は薬を手にとるとネスを睨みつけた。

それは毒が入っているのか疑っているのが伝わった。

「毒なんて入っていません。ただの痛み止めです」

彼は薬をなめる。

毒が入っていないと確認すると直ぐに飲み込んだ。

すると彼はネスを指差した。

「私？」

何を示しているのか考えた。

彼は無表情でじっと見つめてくる。

いや、むしろ観察していると言えば正しいかもしれない。

そして彼が何を言いたいか分かった。

「私はエルネスタ。ネスって呼んで下さいって…あ…」

彼は軽く頷くと目を瞑った。

まるで機械の様だ。

毛布をもう一枚かけてやる。

そして、部屋から出る前に思いたったように言う。

「何かあったらそこに置いてあるカウベルを鳴らして下さい」

そして部屋から出た。

背中に異様な視線を感じながら。

それからというものの名前さえも知らない男と奇妙な生活が始まった。

毎日、足を動かせない彼のために朝昼晩は部屋まで食事を運んだ。

怪我は手が動くようになったので自分自身である程度治療していた。

コミュニケーションは手振り身振り。

それだけで十分に伝わる。

何日かすると声以外だが完治した。

ある日、いきなり彼がナイフを片手に出て行った。

家から決して出るなと指示されたので気にはなったものの家から出れなかった。

小1時間で彼が帰ってきた。

彼は布袋を持っていた。

彼はネスにそれを渡すと暖炉の前にあるソファに座る。

少し驚きつつもその布袋を開けた。

中には捌かれた兎の肉と皮が入っていた。

肉は鮮やかな桃色で引き締まっていてとても美味しそうだ。皮は血で汚れているが綺麗にすれば高額で買い取ってくれる。

「今晚は兎肉のシチューにしますね」

彼に向かって微笑む。だが、彼はじっとこちらを見るが無表情だった。

しかし最近になって気付いたのだがよく見ると表情があったと知った。

今は照れ臭いような誇らしげな表情をしている。

その晩は兎のシチューと兎のスペアリブだった。

久しぶりに肉を食べた。とても美味しかった。

翌日、初めての仕事の日だ。

彼だけ家に残しても何も盗まれたりしない。

ましてや防犯になるので丁度良い。

彼に事情を話し家から出て行った。

彼は本当の無表情で見送った。

明日は仮面舞踏会の日だ。前日に準備するために呼ばれたに等しい。

ネスは早朝、城に足を運んだ。

城に着いた途端に使用人服を渡され、婦長に掃除を任された。それに思っていたより使用人が少なかった。

王様というと多くの召使にあれやこれやとされているイメージがあったがそうでもないらしい。

正門の掃除、正門から中に入って目の前にひろがる赤絨毯の掃除、そして奥まで進むと仮面舞踏会の会場があるのでその掃除も任された。

それらが終わる頃には全身筋肉痛で動けなかった。

それを見た婦長は邪魔のならないところで休憩しなさいと言ってくれた。

その間、会場はみるみるうちに飾り付けされてゆく。

その様子をじっと眺めていた。

急にうつらうつらと眠くなってきた。空はもう暗く深夜をいつている気がした。

家にいる名も知らぬ男が気になった。

作り置きした食事を食べてもう寝ただろうか。

ぼんやりと天井を見た。

大きなシャンデリアが放つ光が頬を濡らした。

結局、日の出と共に解放された。

体はもうボロボロで眠気に襲われた。仮面舞踏会は日が沈んだら始まる。

それより早く来るように言われた。

今度は接客係になるらしい。頭の中で予定を立てている内に家に着いた。

ドアをそつと開け、彼が起きないように気を使い最近ではベッドと化しているソファに寝転がった。

余りにも疲れていたので直ぐに寝付けた。

目が覚めた時には何故かベッドの上で本来寝ていたはずの彼がいなかった。

それと同時に外を見た。

太陽はまだ真上より少し傾いた位置にあった。ほっとする。
もし、時間に遅れたらどうなるか分からない。

下に降りてみると彼は部屋の中には居なかったが窓から庭の方を見たら彼はそこで薪を割っていた。

ネスの視線の感じたのかパツと顔を向けた。

そして斧を壁に立てかけ割った薪を端に積んだあと家の中に入ってきた。

彼はネスに目もくれずに台所に行った。

「……」

そして彼が台所から出てくると両手にはホットレモネードを持っていてそれをネスに差し出した。

「あ、ありがとうございます……」

二人してダイニングテーブルに座りレモネードを味わった。甘酸っぱくてフレッシュで美味しい。

「美味しいですね」

彼は黙ってこっちをじっと見つめた。

少し怒っているような心配しているような表情だ。

「仕方ないですよ、そういう仕事ですから」

しかし彼はうつすらと眉間に皺を寄せたがネスはそれに気が付かなかった。

「あ、そうでした」

思いついたように言った。

「病院に行きませんか？今更ですが」

彼は少し考え、手で『お金』と表現した。

「大丈夫です。前に兎の皮を売ったので」

それにピンときたのか彼は薄く頷いた。

そして、初めて二人で町に行った。

彼はやはり倉庫から見つけたのかフード付きマントを羽織っていて何故か顔を隠すようにして歩いていた。

彼に寒い？と尋ねると首を横に振った。
そのときの顔はとても切なそうだった。

病院に入り順番を待つ。人が少なかったのですぐに診察できた。

彼は話すことができないため一緒に診察室に入る。

「どうなされましたか？」

思っていたより医者が若かったので驚きつつもその質問に答えた。

「彼、声が出ないんです。しかも原因がよくわからなくて……」

医者は彼の喉を触診した。

カルテにさらさらと書いたあと、再びこちらを向いて口を開いた。

「原因のとして精神的なものか、または毒かもしれません」

最後の言葉にぎょつとして彼を見た。だが彼の目は医者を書していた。

その目は何も聞き逃すまいとしている目だった。

「解毒剤を出すので飲んでください」

「治りますか？」

「治りますよ。この程度の毒は何回か治療したことがあるので大丈夫です」

その言葉を聞いた途端緊張がほぐれた。

もし、治らなかったらどうしようかと思った。

だが、もし治ったとしても多少違和感があると思った。

今まで彼の声を聞いたことがなかったからであった。

「もう、いいですよ。お大事に」

「ありがとうございます」

医者にはっこりと微笑んだ。

二人は医者に感謝の言葉を告げて診察室を出た。

帰り道、大通りを通った。その間、ずっと沈黙が続いていたがネスが口を開いた。

「よかったですね。治りますよ」

彼は頷いた。そして彼は時計塔を指差した。

急かしているように見える。

「ああ、まだ大丈夫です。日が沈む1時間に出ますから」

彼は肩を竦めた。

「ついでに服を買いませんか？サイズが丁度いいのを」

彼は嫌そうな顔をした。

多分、面倒臭がっているのだろう。

それを感じとったが無視をした。

「男性の服なんか買ったことがないので自分で選んでくださいね」

彼はまたもや肩を竦めた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

03 仮面

家に帰り、また出る頃には丁度いい時間になっていた。

彼にまた前と同じような時間に帰ってくることを言い、家を出た。

城の前には馬車が渋滞を作っていた。

その渋滞の中を歩いて通り抜け裏口から城の中に入った。

「すいません。遅れました」

そう言って使用人室に入る。

使用人室は狭く必要最適限の物しかない。

そんな部屋に入って一番に気になったのは皆、着る物は同じだが少しめかし込んでいる。

確かに身だしなみは大切だが化粧が尋常なく濃い。

「あら？ネスちゃんはお化粧しなくて？」

使用人の一人のアリシアが声をかけてきた。

「はい、化粧は似合わないの」

「そういわずに口紅はしたら？貸してあげるわよ？」

アリシアは心配そうに言った。ネスは微笑みながら言う。

「いえ、いいんです。このままで」

「そう……無理には言わないけど気が向いたら言ってね？」

残念というばかりに目を下に向けるアリシア。

「お気づかい、ありがとうございます」

微笑み、感謝の言葉を並べた。

そして時間がきた。婦長が大きな声を張り上げる。

「さあ、時間です！お客様をおもてなししなさい！」

「はい！」

手に仮面を取り目元に着ける。

その仮面はシンプルで左目下に植物の絵が描かれているものだった。その模様は人により違う。やはり、仮面を着けたら個人を特定しにくいらしい。

そして、一斉に部屋から出ていき前に指定されていた持ち場についた。

ネスの持ち場は雑用係の為、会場で待機した。

開門と共に時計塔の鐘が鳴る。

まるでその音に導かれるように大勢の人が入ってきた。

皆、鮮やかなドレスに濃い化粧と香水の臭いがした。

やはり、こういう催し物は貴族が主なんだと思った。

顔には当然のように仮面をつけていた。

初めは違和感があったが3分としないうちに慣れた。

赤いワインが入ったグラスを乗せているお盆を片手で持ち、来客に配ってゆく。

「どつぞ」

「ああ、ありがとう」

余りにも来客が多すぎて声が最初よりも機械的になってしまっていた。

「ねえ、ねえ」

後ろから不意に呼ばれたので振り返った。

そこには5歳ぐらいの少年がいた。

「どうかしましたか？」

「はぐれちゃったの」

少年は今にも泣き出しそうだ。

お盆を近くのテーブルに置き、少年の手を引き端へ移動する。

少年と同じ目線になるために屈んだ。

「私の名前はエルネスタです。あなたのお名前をお聞きしても宜しいですか？」

「……ブレア」

ブレアは今にも消えそうな声で言った。

誰か助太刀を探すため辺りを見回すが皆、忙しそうに働いていた。

「一緒に来た方のお名前は分かりますでしょうか？」

「……」

グスグスと鼻をすすする音が聞こえる。ネスはぐるりと目を回した。

正直、こういう事に慣れていない。まず、何をすべきか分からないからだ。

今から親を探すのはあまり効率のいいものではない。

しかも、親の名前を言わないという事は訳ありかもしれない。

顎に手を当てて考えた。だが結論は出なかった。

「っえ」

と、いきなり強く腕を掴まれた。

その小さな手はその体と不釣り合いなほど強い。

ギツとその力が強まった。

そしてブレアが片手で己の仮面を外した。

その目は真っ赤でルビーのように美しくかったが何故か不気味だった。

「【エルネスタは僕の命令に従わなければならない】」

ルビーの目を大きく見開きその顔に合わない言葉を言った。

「……………っ!？」

次の瞬間に身体が動かなくなってしまった。

体中から力が抜けてまるでマリオネットになった気分だった。

そしてブレアは何事も無かったように仮面を着ける。

「ねえ、遊ぼうよ。エルネスタ」

につこりと無邪気な天使のようにほほ笑んだ。

今は悪魔の微笑みに見える。

「この中は臭いから外に行こうよ」

「……なに……を……」

操り糸に抗った。

本能的が告げている。

【こいつは危険だ。逃げろ】と。

だが、身体が動かない。

視線で誰かに助けを求めても仮面を着けているので表情が伝わらない。

「そんなことはどうでもいいよ」

イラついた声で言われた。

「解い……て……」

口の中が渴いた。

「駄目だよ。君は僕の玩具なんだから」

優しく頬に手が触れた。その手は冷たく氷のようだ。

「【立って外まで歩け】」

体が自由にならないまま裏庭に出た。

その間、ブレアはネスの手を繋いでいた。

逃げるのを阻止しよとしているのを感じた。

そして会場が小さく見える所まで来た。

今、立っている所は木の影で会場からこっちは見え難い所だ。

恐怖の顔をした私はどんなに酷い顔をしているのかと考えて気を紛らわした。

しかし、何をされるか分からない。

子供だからといって油断出来ない。

色んな場合を考えそうになったが直ぐに掻き消した。

——ブレアが歩みを止めた。

そして胸ポケットから折り畳み式ナイフを取り出した。

パチンと歪な音を発てて刃を出す。

「【腕を出せ】」

体が言うときかない。

ナイフが腕の皮膚を切り裂いた。

痛みより恐怖が勝っていて痛みを感じない。

ゆっくりと赤い玉を作る。

その赤い玉をブレアは腕を取りペロリと舐めた。

その異様な光景に気分が悪くなった。

——カニバリズム
人肉嗜食。

人が人を食らう。

肉ではないがそれに近いものだ。

それだけでも恐ろしい。傷口が小さいためすぐに塞がる。

「……ますます気に入ったよ」

そういつとブレアは息を吐いた。

そして口から出た黒い霧に囲まれる。

みるみるうちに全身を包み込みそれが段々と肥大化していく。

まるで大きな黒い風船のようだ。

その風船は針に突かれたように急に丸い形から人型へ変わってゆく。

そして、黒い霧が取れたかと思うとそこにはさっきまでそこにいた少年はいなくなり青年へと変わっていた。

その姿はこの世の者とは思えないほど美しいものだった。

髪の毛は赤黒くて目はルビーのような目だったが先ほどよりも透き通っていてとても透明感あふれていた。

肌は少しだけ普通よりも青白く、病人のようだ。

——それはもう本で読んだ吸血鬼と一緒にだった。

「ねえ、僕の専属の使用人にならない？お金ならいくらでも出すよ？」

そう言いながらネスがつけていた仮面を外した。

顎を親指と人差し指で掴み顔を上げさせられる。

情けない顔を見られるのは辛い。

「やっぱり君は泣いている顔が似合ってる」

ニコつと無邪気に笑った。耳元で囁きそのまま口を目尻につけた。

「一生、泣いてればいいんだ」

そしてそのまま抱擁をする形になったが彼の顔は首元にあり顔を近づけ、ナイフで皮膚を裂きそこから出たものを舐める。

顔は見えないが驚いた息遣いが聞こえた。

「これは…イヴ……？お前…イヴなのか……？」

ブレアはネスとの距離を取ると右手を使い笛を吹いた。

ピーーツ！

とても高く耳を澄ませなければ聞こえない音を出した。

遠くの空から大きなカラスがこちらへ向かってきた。

そして、ブレアとネスの間に着地した。

「兄貴に【見つけた】と伝えてくれ」

その言葉を理解したのかカラスは空に舞い上がりすぐに姿を消した。

ブレアはネスに向き直る。

「これあげる」

また口から黒い霧を吐き出した。

ブレアはネスの手を霧の中に手を入れる。

霧が無くなると手首には黒い鎖でできたブレスレットがついていた。

「お礼と御守りの意を込めて」

ブレアが両手をパンツと鳴らす。

同時にネスの意識も消えていた。

目が覚めたとき、目の前には家の天井が広がっていた。

今までが夢だったのかと思ったがその考えは直ぐに打ち破られた。

手首にはちゃんと昨日証がついている。

外そうとしたがサイズがぴったりで焼き付かれたようにはめられている。

それならばなぜ、ここにいるのだろう。

本来、ならあのまま城の庭で芝生にキスしているはずだ。

いや、それより彼が気になった。

あの夜、あの城で出会ったブレアだ。

彼はただの人肉嗜食カニバリズムを信仰している異端者が本で読んだあの血を糧にし、永遠を生き続ける者なのか……。

それにブレアが言っていた【イヴ】とは一体……？

混乱する。己の体を二本の腕かいなで抱いた。

——怖い。

独りで暗闇の中を歩くことと同じで目の前が見えない。

誰かが道を教えてくれればいいがそんな人は存在しない。

気づかない内に真っ直ぐと奈落へと落ちる滝と同じ。

気分が悪いのでベッドから体を起こした。

足の裏をひんやりとした絨毯につける。

片手をサイドテーブルに置き立ち上がろうとするが鐘を打ったかのように視界が揺れた。

バランスを崩し、サイドテーブルにすがりついたとき上に置いてあったカウベルが床に落ちた。

ガシャーン

派手な音が部屋の中に響き渡った。

コロコロとカウベルがベッドの下に転がりこんでしまった。

それと共に下からバタバタと階段を駆け上がる音が聞こえ、部屋の前まで来ると豪快にドアを開けた。

そこには無表情だが微妙に感情がある彼がいた。

今だに名も知らぬ彼が口を開いた。

「エルネスタ……」

彼の声を初めて聞いた。野太くてなめらかで何とも言えない声だ。

驚愕の瞳で彼を見たがいくら見ても彼は彼だった。

しかし、彼の声と顔は怒っているような、安心していているような声だった。

ネスの表情に気付いたのか眉間に皺をよせた。

「……おい。大丈夫か」

彼はネスを軽々と持ち上げ、ベッドに寝かせた。

「……声、治ったんですね」

「……ああ」

彼は毛布をネスにかけた。

まるでその光景は既視感だ。デジャウ

違いはただ一つ、彼がネスでネスが彼なのだ。

「……カイン」

彼がじつとネスの瞳を見つめた。

「…………え？」

「俺の名前だ。…………色々と感謝する」

素っ気ないがカインは恥ずかしそうなのが伝わった。

ここで笑うと怒られるのが目に見えている。

「今更ですがどういたしまして。…………一ついいですか」

「…………？なんだ？」

カインは何か重要なことだと思いネスを見た。

「美味しいホットレモネードを下さいな」

To Be Continued…

04 心配と疑問

「美味しいですね、このホットレモネード」

両手で白いマグカップを支えて一口飲んだ。

うん、美味しい。

太陽は真上にきて、地面に残っている雪を溶かしていた。

それは春の訪れを指しており、肌でも感じられるくらい暖かくなってきた。

そろそろ、暖炉と暫しのお別れが近づいていることにしみりする。

もう、この国（厳密には国外だが）に来て5か月経った。

今日は仕事を休んでしまっているが今の仕事は正直、嫌いじゃなかった。

むしろ才能があるじゃないかと思うほどだ。 婦長さんにだって褒められたほどだ。

今、思いがけない同居人のカインと共に一緒に彼お手製のホットレモネードをソファの上で飲んでいるほど平和だ。

平和はとてもいいことだ。 いいことだが……。

ネスは己の手首を見た。

——そこには黒い鎖のブレスレットがはめられていた。

ブレアという謎の少年なのか青年なのか分からないが彼に無理やりつけられたものだっただ。

そのブレスレットを取ろうと必死の努力をしたがすべて無念に終わった。

最後の試みで手首を切断しようとしたがカインに止められた。

なんだか負けたような気がしたので彼に反論したが軽く流され、それから一週間ぐらい刃物を持つことを許してくれなかった。

それ以前に気になることがあるので今からカインにぶつけてみることにする。

「あの……私ってどうやって舞踏会の夜、家まで帰ってきたのですか？」

カインの体がピクつと動いた。

地雷でも踏んだかと思ったがその様子は無表情で隠されていて分か

らない。

「何故そんなことを聞く？」

「もちろん知りたいからです」

カインは少し悩み口を開いた。

「……落ちていた」

「は？」

彼の眉間に皺がよる。

「玄関に落ちていたからベッドに運んだだけだ。問題があるのか」

「……もう少し具体的に説明してくれるとうれしいです」

カインはレモネードを一気に飲み干しテーブルの上に置いた。

そしてゆっくりと口を開いた。

ネスは彼が見た全てを教えてもらった。

話の内容はこうだ。

普段通りに寝ているとドアをノックする音が聞こえた。

不気味に思い窓から覗いてみるとネスが玄関の外で倒れていた。

それも、血まみれで。彼は一瞬で肝が冷えたという。

「以上だ。質問を受け付ける」

「……ないです」

「そうか」

今度、カインを市場に放置しておばちゃん達の会話の餌食にしてやろうと思った。

……しかし、想像すると気持ち悪い。

ペラペラとおばちゃんと話をするカインを見たら余裕で気絶できる。

そんなことより何故、親切に家まで送ってくれたのだろう。

殺すつもりがなかったのか、ただ単に生かされたただけなのか。

仮に生かされたとして一体何になるのか……。

疑問が疑問を生んでしまう。

ブレアを捕まえて話しをさせればいいのだがまた変な術を使われたら元も子もない。

それよりはそのことを全て忘れて平和な暮らしをした方がよっぽどいい。

そうだ。全て忘れよう。

何事もなかったように暮らそう。

そう決心し、カップをシンクに置いた。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえた。

ドアに向かおうとしたとき急に後ろから抱きつかれ彼の手の片方は腰にもう片方の手はネスの口を押えた。

『んんっ！』

耳元で囁く。彼の生暖かい息が耳の中に入ってきてゾクツとする。

『おかしい』

『ふ？』

『いいから落ち着いて外をってみろ』

指示されまゝ窓から外を見る。

そこには王国政府の軍隊がいた。

明らかにおかしい。

しかも外で腰に武器を下げて誰かが出てくるのを今かと待っている。

彼は落ち着いたネスを見てやっと腕を離れた。

『私、何かしましたっけ……？』

『あんたは何もやってないだろうが』

『……【あんたは】って…まさか、心当たりがあることがあるのですか……？』

『……』

『……』

コンコン

二回目のノック音が鳴り響く。顔がますます青ざめる。

『どっ…どうするんですか!?!』

『俺が出るから隠れている。指示するまで出てくるな』

ネスは直ぐに頷いて二階の倉庫部屋の大きな衣装ケースの中に入った。

音でネスの行動を確認するとカインはナイフを素早く抜ける用意をしてドアを開けた。

どっくん…どっくん…

はぁ…はぁ…

2つの音が共鳴する。

バンッ！！

ドアを蹴破る音がした。カインは無事だろうか。

兵士が家宅捜査をしているのが分かる。

ドストスと二階に上がる音が聞こえてきた。

また、ドアを蹴破られた。

まずは寝室。

次に倉庫部屋。つまり……

——ここだ。

体が震えるのを堪える。

「本当にいないだろな!？」

「貴様の目は節穴らしいな」

カインの落ち着いた声が震えを癒す。

彼は挑発的で余裕綽々そうだ。

「気が済んだが？政府の犬が。さつさと城へ^{おうち}帰れ」

「てめえ……いつかなったらその首へし折ってやる」

「楽しみだな」

普段使わない暴言を吐きまくっている姿に笑いが出そうになった。

口論しながら兵士が部屋から、そして家から離れて行くのが分かった。

「出てきていいぞ」

優しい声と共に衣装ケースから出た。目の前にカインがいる。

既に居場所を知っていたらしい。超能力でもあるのだろうか。

「女性だけの感染症があるから検査をしたい」だと

「そんな病、聞いたことがないです」

検査という言葉だけに何か引っ掛かる。ふっとカインが笑った。

「風呂に入ってきた方がいい。埃がすごいからな」

ネスの頭をポンポンと優しく撫でた。

その時、ネスは分かってしまった。

この爽やかな笑顔の原因が。

彼は今まで溜まってきたストレスを憂さ晴らしに兵士にぶつけていたのだ。

またもや少し笑いそうになったが堪えた。

次の日、使用人室に行くと会話は昨日の女性限定の検査で持ちきりだった。

「何でそんなことをしたのか分からないわ。ネスちゃんはどう思う？」

アリシアが話を吹っ掛けてきた。

黒色のワンピースの上に白いエプロンを着けて紐を後ろに縛る。

そして、赤いリボンを首に付けた。

「本当に感染病だったのかと思いますけど……」

「でも、軍隊まで出勤させることなんてある？……もしそれが本当なら私、死んじゃうのかな……？」

「そんなっ、大げさな！」

泣きそうなアリシアを慰めようとしたが大きな声を出してしまったためポロリと涙が流れた。

動揺しながらもアリシアに言う。

「それよりもさっさと仕事につきましょう？ 婦長さんに怒られますよ？」

それに今日は具体的な仕事場が決まったのだ。内容は庭掃除。

普通に庭師に頼めばいいのだが王が認めた庭師がこの国には居なかったため、使用人がこれ以上ひどくならないよう適当に手入れを施していた。

だが、あまり人気がない。

何故ならば蜂や芋虫、虫の卵それに肩や腰痛、手荒れや切り傷の戦いが繰り返られるからだ。

農民育ちのネスにとって当たり前のことだったがアリシア達にとって恐ろしいことらしい。

経験が生かされるのは光栄なことだが少し複雑であった。

手袋を着けスコップと麻袋と掴み、外に出た。

大きな木でできた一輪車にそれらを放り込み庭に向かった。

庭には大量の花壇に大量の枯れた薔薇が無造作に放置されていた。雑草まみれで荒れ放題だ。

「なるほど……」

それからというものの大改造が始まった。

花壇にある雑草や枯れた薔薇は全て麻袋に放り込んだ。だがそれだけで一週間費やした。

手袋を着けているのにも関わらずそれだけで手が荒れて傷まみれになった。

そのことをカインに黙っていたがすぐにバレてしまい彼に暴力的なほど問い詰められた。

あれほど怒った彼を今まで見たことがない。

最終的には他の職についた方がいいと言われたが流石にそれは拒否をした。

次に害虫駆除を3日間かけてやった。時々、大きい虫がいたり何故かお金や宝石が入っている鉄の箱を土の中から見つけたりした。

誰かのヘソクリだろう。綺麗に箱を磨いてまた埋めといた。

——その晩、いつもより早く家に帰った。

ある程度、城で泥を落としたがまだ汚いので風呂に入ることにした。

浴室はトイレと同じ部屋に位置していてその間をカーテンが仕切っている。

質素なタイル張りの浴室に白いバスタブが1つ、床に置かれた洗剤が入った瓶、そして蛇口とシャワーが備え付けられていた。

タイルの上をヒタヒタと歩き、カーテンを引き、シャワーの蛇口をひねる。

暖かいお湯が泥と疲れを流してゆく。

体を清めたあとバスタブにはったお湯に浸かった。

水面に浮かぶ泡をすくい息を吹き掛けた。

久々にまったりしたため、うとうとしてしまった。

少しぐらいならと思い目を瞑った。

「…………い！起きろ！ネス！」

次に目を開けたとき、カインが目の前にいた。ぺちぺちと頬を叩いている。

彼は片足を立ててそこにネスをよりかけていた、

「どうしてあんたはいつも俺を心配をさせる!？」

「へ？」

状況が理解できない。

察した彼はあきれたように息を吐きながら言う。

「……もう、いい。服を着ろ」

段々と意識を取り戻したときには遅かった。

カインに裸を見られたことに顔を真っ赤する。

一応、バスタオルが肌に巻かれているが露出度は大きい。

ネスの表情に気が付いたのか彼もまたほんのり頬を染めたのが分かる。

「きああああ！」

胸元を押さえて叫んだ。

その時、外で寝ていた鳥が一斉に飛びだったことを彼女は知らない。

「もう、お嫁にいきません……」

「そうか。残念だったな」

機嫌を直せと言われてコーンスープを作ってくれた。

それを啜りながらソファに彼と共に座る。

なんというのかももう習慣になりつつなっていた。

彼が作るスープや飲み物を白いマグカップに注ぎ一緒にソファに座り飲む。

ちなみに前はオニオンスープを作ってくれたことは覚えている。

「……見ましたか」

「見えた。だから何だ」

どうも立ち直れそうにない。

俯いてコーンスープを覗いた。

顔がまだ赤いのが分かりますます恥ずかしくなった。

カインが言いにくそうに口を開いた。

「気になったことがある」

「……何ですか」

ぶつぶつと呟えた。もう、どうにでもなってしまうと心で叫ぶ。

「あんたの背中的大量の古傷……どうしたんだ」

少し肩が揺れたことは彼は決して見逃さない。

嫌なら話さなくてもいいと彼は言った。

これから先、彼はその謎を一生忘れずに生きていくのが嫌だ。

だが、それはネスにとって辛い過去を晒すことであり、羞恥を知られる行為であった。

3分ぐらい口を閉ざし、彼の目を見た。

カインは不味いことでもしたかという目をしていた。

ネスは苦しそうに口を開ける。

「長いですけど全てを聞きますか？それとも短く話しますか？」

「……全てを知りたい」

「それでは——」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

05 記憶の闇

ネスが物心ついたとき海辺の町の下水道で生活していた。

——ストリートチルドレンだ。

親に捨てられ、保護されることなく路地で睡眠をとり、毎日と死と生の境を生きているモノ。

常に無気力で生きていたため死んでも生きても世界は変わらないと
考えていた。

汚い服に汚い体、礼儀も知らぬ世間のゴミ。

すれ違う大人に何を言われようがどうでもよかった。

藁で作った籠を置き、それを崇めるように手に持って座る。

気分のいい金持ちが時々、お金を入れてくれる。

それだけが収入だった。

働きたいが歳も足りないし、女というだけで毛嫌いされた。

使い物にならないからだ。

もしも、歳がある程度までいっていたら娼婦になることができる。

収入は得ても精神的に肉体的にも障害が起こるがお金や性欲のためならかまわない者がやる職業だ。

当然、そんな職にはなりたくなかった。

確かにお金は欲しいが知らない男の下で喘ぐのは勘弁してほしい。

チャリン

籠の中にお金が放り込まれる。

入れたのは身なりが下品な男だった。

もちろんネスよりはまだマシな格好だが。

「神のご加護が有らんことを」

機械的に言う。

これで晩御飯はパンに決まりだ。

「……？」

一向に目の前の男が動かないことに気が付いた。

ただじつくりとネスを見ている。

まるで足から爪先までなめるように。

――ハンター
狩人だ。

世間の大人は【害虫駆除】と言って笑っていた。

人を攫って売ることが職業の輩のことだ。

気が付いたがその時はもう遅かった。

腕を引かれ馬車に詰められ、知らない船に投げ込まれた。

泣き叫んだため背中を鞭で打たれた。

それが楽しかったのか何回も声が枯れるまで打たれた。

その時、ウケイス 鷺を意味するどこかの国の言葉でエルネスタと船員が名前を付けた。

船が着くと直ぐに馬を洗うように体を洗われた。

そして、まるで商品にラッピングをするように薄い化粧を施し、服もマシなものを着せられた。

そして何週間か経った頃にオークションにかけられた。

その間、豚小屋に放り込まれていたことは決して忘れてない。

木でできた斬首や絞首をするための処刑場が会場になっていた。

この国では政府が暗黙の了解で認めているらしい。

大体の国の発展は奴隷で成り立っていることは知っている。

手は縄で縛られ、首にはタグが付けられる。

「傷が多少ついているが中々の美品だ！銀貨3枚から！」

男どもの薄汚い声が聞こえる。

「銀貨6枚！」

「銀貨8枚！」

「金貨1枚！」

どんどん値上がっていく。次第に会場が白熱してきた。

私にそんな価値があつたのかと感心した。

「金貨3枚だ！」

会場から苦しみを堪える声がする。

「もう、いないのか！？」

審判が木槌を降り下ろす寸前にその声が聞こえ、途端に場が静まりかえった。

「金貨10枚」

ネスの購入者は優しく気品のある老人だった。

老人の屋敷に入った瞬間に使用人によつて風呂場に連れられた。

丁寧に汚れを落とし、髪は綺麗に整えられ、服も綺麗なものを与えられた。

全ての身なりが終わり老人の前に立つ。

老人は感心するような顔つきだ。

「私の名前はグローリーだ。お嬢さんのお名前はなんと？」

困った。

名前なんか使ったことがない。

とりあえず、あの名前を名乗る事にした。

「エルネスタ」

「……【鶯】か。良き名だ。エルネスタ……年寄りには言いにくいから失礼だがネスと呼ばせていただくぞ。…ネス、君に頼み事がある」

「何ですか？」

「息子の世話だ。というより人間的感情をつけて欲しい。あいつは

どうもそこが欠けているらしく、名門の婚約者を何人も捨ててきた」

「……はあ」

適当に気が抜けた相槌を打つ。

「給料と食事は勿論出す。ただし、息子からはなるべく離れずにしてほしい」

「……」

世話をしたりして人間的感情をつけさせればいいという事らしい。ふと疑問に思ったことを口に出した。

「息子さんのお名前は？」

上品に片眉を上げ3秒ぐらい固まりまた口を開く。

そして、笑顔で言った。

「本人に聞いてくれ」

これから波乱万丈になるとはこの時一切思わなかった。

むしろ簡単だと思ったのが間違いだった。

使用人に案内され例の息子の部屋の前まできた。

大きな扉に啞然とする。

「こちらです」

使用人がドアをノックしたが何も反応がない。

「ご主人様の命です。開けてください」

ガチャガチャとドアの鍵を開ける音がした。明らかに鍵の数が多すぎる。

ドアが少し開きギョロリと目を覗かせた。

部屋が暗くてこちらからではどんな顔をしているのか分かりようがない。

「何？」

「本日から専属のお世話係をする……」

「要らないから。適当にお金渡して帰らせて」

凜とした声が耳に届く。

そして、ボタンとドアを閉じて鍵を閉めていく音が大理石でできた廊下に響いた。

使用人が指でドアを示し困ったように首を傾げた。

——ネスの生活が今、始まった。

部屋の前で暮らし、暑いときも寒い時もドアの前に座り続けた。

正直、ストリートチルドレンをしてきたときと変わらない。

ただ状況がよくなったただけであつた。

毎日食事のことを気にしなくて済んだため暇を持て余した。

そのため使用人に頼んで読み書きや計算を教えてもらっていた。

それから半年ぐらいたった。

ある程度の読み書きと計算ができるようになった頃、彼から部屋を少し開けてネスを見た。

ポイツと本を投げつけられ頭に衝突した。

相当嫌われているんだ、としゅんとなった。

ドアを閉め、ドアの下の方の隙間からメモが出てきた。

『おすすめ』

本を拾い上げの題名を見ると【七人の魔法使いとドラゴンの秘宝】という何ともファンタジックな本だった。

ネスは辞書を引きながら一週間かけて読んだ。

ドアをノックし、隙間から習った文字を使い言葉を書いた。

『おもしろかった。かへしたい』

ところどころ間違っているが彼には通じたようだった。

そのとき初めてドアが大きく開いた。

「入れ」

たった一言、彼は言った。

部屋の中に入るとカーテンが閉められていて暗かった。顔がよく見え
ない。

「君、一体何者なの？」

尋ねてきた。

「……人間ですけど？」

質問の意味が理解できない。

「名前は？」

「エルネスタ。貴方こそは？」

「アレックス」

「……」

「……」

ステージは2回戦目に突入した。

部屋の前にいると邪魔だから中に入れと言われ、布団一式を引きずり部屋の隅に置いた。

トランクをもらい、廊下に置いている服や小物を詰めて引きずりながらそれも部屋の隅に置く。

アレックスはベッドの上で胡坐をかき、ネスは床で座る。

「……」

「……」

沈黙。

「ねえ、カーテンと窓を開けない？」

「……」

「空気が悪いから開けるよ？」

精神的にも、と言いそうになった。

反応がないのでカーテンを引き、窓を開けた。

その瞬間、埃が部屋を舞う。鳥肌が一齐に立った。

「気が済んだ？」

「うん」

その時、初めて彼の顔を見た。歳はあまり離れていないように感じる。

髪の毛は赤茶で目は茶色、美しい顔立ちをしていた。

見とれてしまった。

「あの……」

「アレックス」

「？」

「教えたろ、呼んでよ」

イライラとした感じで言われた。

気を取り直してもう一度呼ぶ。

「アレックス」

「何？エルネスタ？」

優しく反応してくれた。

「お掃除していい？」

それを聞いたアレックスは目を丸くした。

ふっと笑い、どうぞ？とアレックスが許可を出した。

しかし、どうもネス以外を部屋に入れたくないらしく結局、掃除をするのはネス一人になってしまった。

バケツと雑巾を抱えて部屋に入る。

彼にもらった友情の証という名の鍵を使い部屋の中に入る。

―― 5 時間後。

もう夕方になってしまったが部屋は随分と綺麗になった。 うん、完

壁と頷く。

「エルネスタ、何を考えている？」

後ろから話しかけられビクリとする。気配がまったく感じられない。恐る恐る後ろを振り返りアレックスの方を向いた。

「えっと……布団をどこに敷こうかと」

「違うよ、……あのさ……なんで僕の世話係なんて受けたのさ？」

彼は悲しそうに聞く。

それに気づくことなく淡々と答えた。

「グローリーさんが雇ってくれたから」

「……もう、……いいや」

「そう……お休みなさい」

布団と枕を抱え外に出ようとする。

だが彼によって妨げられた。

腕を掴まれては外に出られない。

アレックスは掴んでいる腕を引っ張り一緒にベッドに倒れ込んだ。

「僕は君の行動が理解できない」

「私は貴方の言っている意味が分からない」

「……前に言ったじゃないか。廊下にいると邪魔。だから一緒に寝よう?」

さも当たり前のように言う。

「……うん」

そしてその夜、人生で初めてベッドというもので夜を明かした。

彼は布団の中で手を繋ぐ。それは鎖のように感じた。

日の出と共に目が覚めた。

体が動かない。

金縛りだと思ったらアレックスがネスを抱き枕にしていた。

正面から抱かれているので規則的な心臓の音が聞こえる。

「……んっ」

腕に力がこもり、足を絡ませてくる。

随分と重い。アレックスの腕と足からのっそりと逃れる。

彼はまだ寝ているので音を立てないように服を着替えた。

前に与えられた黒いワンピースを着る。

後ろにあるボタンが上手く閉められなくて悪戦苦闘していると冷たい手がそつと閉めてくれた。

「……起きてたんだ。」

「エルネスタ……背中どうしたの?」

「……」

「僕には言えないのこと?」

「……これはっ」

「言えるよね?」

落ち着いた声で問い詰められた。逃がそうとはまったく思っていないらしい。

出来れば彼にあのことは知られたくない。醜く、辛い頃の私。

「……泣いたから……泣いたから鞭で叩かれた」

「たったそれだけで?」

「……」

ここに来るまでのことを全て話した。

全てを聞いた彼は言葉を選びながら言った。

「君は…つまり…奴隷だったの?」

「……うん」

記憶が生々しく頭の中で再生する。

「で、グローリーに買われたの？」

「うん」

急に彼は歯を食いしばり部屋を飛び出していった。

その背中を眺めながら白いボレロを上から着た。

数分後、何事も無かったように彼は戻ってきた。

その目は悔しそうな目をしている。

事情を聞こうとしてもただ微笑み、君は何も悪くないんだと言っばかりだった。

それからというものの彼の様子がいい方向に変化してきた。

急な変化にグローリーに話を聞くとこの家の後を継ぐと言ったらしい。

——それから8年の歳月が流れた。

アレックスはすっかり大きくなりネスも負けずに大きくなっていた。
それと共に絆がより深まった。

一緒に寝るといふ習慣とネス以外は部屋に入れないということだけは変わらなかった。

ネスはアレックスが書き物をしているときずっと隣で立ちながら本を読んだ。

「なあ、ネス」

「なんでしょう」

物を書く姿はグローリーにそっくりだ。微笑ましくなる。

「婚約者ができたんだ」

「……おめでとうございます」

ピタリと彼の手が静止した。

彼は椅子から立ち上がり目をネスに合わせ、持っている本を叩き落とした。

本が床を叩く。

「嫌なんだ。あんな汚らしい雌豚となんかと婚約したくない」

「……そうですか」

「君が好きなんだ」

立ち上がりネスの両肩を掴む。指が食い込む。跡が付いたなと感じた。

「ありがとうござっ……」

ふわりと冷たい唇が柔らかく暖かい唇に触れる。

中途半端に開いていた唇を舌でこじ開けて突き入れてきた。

両手で胸板を叩いたが微動さえない。

顎を手で押さえつけられ逃げないようにされた。

歯をなぞり、舌を絡められる。慣れていないので息が続かない。

「は……んっ」

足の力が抜け、体が崩れそうになったがアレックスが無理やりに腰に腕を回し、崩れるのを阻止する。

顎から生暖かい液体が流れ落ちるのが分かった。

ベッドに倒されたせいでスプリングが軋む。

目から雫が流れシーツに染みをつけた。

それを見て理性を取り戻したらしくアレックスはネスから離れた。

「……すまない」

「……」

「あんな……」

彼はずいぶんと困惑しているのが伝わる。

「私も……貴方が好きでした。…それはとても危ないことだと知っていました」

「ネス……」

目を大きく見開き嬉しいそうだ。それに反してネスは悲しそうな表

情を作り言葉を続けた。

両手で仮面を作る。涙が流れない魔法の仮面だ。

「貴方から……そのようなことが聞けて嬉しかったです。だからこそ……」

潮時なんです、と言えない。喉に何かが詰まる。

「……」

「……少し一人になってきます」

ベッドから立ち上がり外に出た。行き先は勿論、グローリーの書斎だ。

全ての仕事が完了したことを知らせに涙を堪えて走った。

退職届を出すことに関してグローリーは反対しなかった。

むしろその方がいいかもしれないという判断が下った。

時間をかけ、アレックスにバレないよう荷造りをした。

その間、アレックスはいつもより執着心が強く感じられた。

昼間アレックスがお見合いをしている最中、グローリーが手配してくれた馬車に乗り込んだ。

行先はジウ王国。

家や仕事は彼が既に手配してくれていた。

これが退職金だと彼は言う。

当たり前だがアレックスはその事を知らない。

彼には幸せに暮らして欲しいと馬車に揺られながら祈った。

To Be Continued...

06 闇の中の姫

「……そう、…だったのか」

「面白くない話ですよね」

苦笑いをしながらカップの底についている乾いたコーンスープの残りカスを見つめた。
スプーンで突っついてみたが取れない。

「なあ、その…アレックスというやつはその後どうなったか知っているのか？」

ぐつと喉の奥が痛くなる。

「……知らないです。グローリーさんがもう関わってはいけなとおっしゃっていたので……」

なんとなく目が合わせ難い。問い詰められそうで手が震える。

横目で外を見るとうつすらと明るくなっていた。

隣でソファーに座っていたカインが急に立ち上がりハンガーにかけ

てあった黒い色のコートを羽織って外に出ていってしまった。

やっぱりつまらない話だったんだ、そう思うと心が苦しくなった。

その場で横になってみる。

ランプの火がゆらゆら揺れていてまるでネスを誘う様だった。

――目が覚めた時、昼間になっていた。

カインの姿が未だにない。

一々、人の行動を知りたがる訳ではないが一言ぐらいどこに行くか言ってくれば変な心配事をする必要がない。

寧ろ言葉足らずが彼の性格かもしれないが。

その時、ドアが開く音がした。カインが帰ってきたかもしれないと思っ顔を上げた。

しかしそこにはカインの姿はなく、見ず知らずの男が立っていた。

「っ!？」

男はネスの口元に薬品が染み込んだ布を強引に押し付けた。

柔らかい布の上で目覚めた。目隠しをされているので辺りがどうなっているのか分からない。

手足が重たく冷たい。手枷と足枷がはめられているようだ。

焦らずにゆっくりと体を起こした。スプリングが軋む。

つまりベッドの上で寝ていたということになる。

四つん這いになりながらも段差を見つけた。

冷たい絨毯の上に足をおろす。

冷静を保つため、一息つく。少ししか動かない手を使い目隠しを下にずらした。

辺りを見渡したが暗くてよく見えない。

白と黒、赤を基調とした家具が見つめ返してくる。

あまりにも広すぎるため奥の方が見えない。

窓が視界に入る。空は不気味に濁っていた。

「エルネスタ……」

聞いたことのある声が室内に響き渡る。

体が揺れた。

驚いたせいもあるが声の主が醸し出す冷気なのせいが強かった。

真っ赤なカーテンの端に人影が映る。

自然に後ずさりし、ベッドの上に逆戻りする。革靴が床を叩く。

「……」

音が次第に速くなる。息を潜め相手の行動を伺った。

「ネスっ！」

「わっ！」

顔を確認する暇もなくベッドに押し倒された。

抱き締める腕が強すぎて息が出来ない。

「苦しつ……っ！」

名残惜しそうにゆっくりと体が離される。

しかし、体に覆い被さったままだ。

そこには赤黒い髪に金色の目をした青年がいた。

「……誰？」

苦笑いで尋ねる。

彼は悲しそうな顔をしたが直ぐにそれを消した。

「忘れたなんて言わせない」

金色の目を細ませる。

ネスは導かれるように恐る恐る彼の頬に触れた。冷たく氷のようだ。

彼はネスの手の上に己の手を重ねる。

「……う…そ」

髪の毛の色や目の色は微妙に違うが面影が残っていた。

「久しぶりだね」

もう会うことはないと思っていた人が目の前にいる。

「な、んで？」

死人が復活した姿を見ているようだった。

アレックスはにっこりと微笑む。

「邪魔な雌豚と頭のイカれた爺は消した。これで僕らは結婚出来るんだ」

ネスの顔はますます青ざめてゆく。

「……」

アレックスは怪訝そうな顔をした。

「やっぱり、僕は君がわからないよ。……ああ、そうか！グローリーの後をついでこの国の王になったんだよ。この国に住んでるってブレアが教えてくれたからさ。だから王になったんだ」

誇らしげに言う姿はなんとも懐かしいものだ。しかし、会話が噛み合わない。

「王様は……」

王の名前とアレックスの名前が一致しない。

「ああ、クレイグ・ブラックなんてただの仮名さ」

「ブレアは……」

「腹違いの弟だよ」

知らないところで世界が繋がって、そして変わっていく。

余りにも無知過ぎる自分に嫌気がさしてきた。

涙が流れ落ちシートに染みをつくる。

「何が起こっているの……」

「君は本当に何も知らないんだね。教えてあげるよ」

T o B e C o n t i n u e d . . .

07 冷たい太陽と暖かい月（前書き）

！微える注意！

07 冷たい太陽と暖かい月

——時は遡り、ネスが屋敷を出て行ったときのことだ。

いつも通りの朝にいつも通りの昼。

夜には大きなベッドの上に寄り添い合う。

常に一緒にの二人。磁石のように一瞬だけ離れても直ぐにくっつく。
それを”異常”と言うものもあれば”微笑ましい”と言うものもいた。

月の見えない真っ暗な夜、アレックスは湯船に浸かっていた。

「ネス、タオルを」

ドアが静かに開きタオルが渡された。

だが、何か違和感がある。

じつと様子をうかがうと次第にタオルを持っている手が震えてきた。

明らかにおかしい。

素早く手を掴み、全体の姿を晒させた。

そこには使用人の女がいた。迷わず女の首を掴み、持ち上げ足を宙に浮かせた。

「っ！」

「お前、一体何のつもりだ？ネスをどこにやった？」

女を床に投げつけた。

「がつ！」

額から血が流れて模様をつくる。

「早く言え！！」

足で蹴飛ばしても反応がない。気絶したらしい。

「チッ！」

舌打ちをして服を着た。

ネスが一言も言わずに離れる訳がない。

——そう、躑をしたのだ。

何かある。ネスに対して何かしら言うのはグローリーだけだ。

直ぐ様、書斎に向かった。ドアを蹴破る。

「てめえ！！何かしただろう！！」

パイプをくわえていたグローリーが優雅に振りかえる。

「何かとは？」

不敵な笑みに苛立ちが積もる。

「ふざけるなっ！！」

「不要となつたからいなくなった。だだそれだけのことじゃろっ？」

近くにあった椅子を投げつけた。だが、無意味な空振りとなってグローリーの後ろにある窓ガラスを無造作に割った。

「あんたは過剰なほどネスに執着し過ぎた。婚約者を見向きもせず。しかも婚約者を殺してしまったであろう？死因は内臓破裂。性交中に相手の腹に爆弾を入れるなんて聞いたことがないぞ？」

「おい…ネスは何処にいる？」

興奮を鎮めるため髪をかき上げる。

「揉み消すのにどれだけ苦労したか」

自分が欲しい返答は一切ない。

しかも困った子供に話しかけるように喋るのに腹がたつ。

「おい!!」

「ふん……今頃、馬車に乗って国外にいるはずじゃ」

それを聞いて外に飛び出した。

馬にまたがり探しまわったが見つけることはなかった。

その後、屋敷に戻ったアレックスはグローリーが王であることを聞かされた。

王だったラネスの居どころが掴めるかもしれない。

そうしてグローリーを殺して時間をかけて国を治める権力を手にいれた。

話を聞けば聞くほど涙が溢れてくる。

一向に涙が止まらないネスに反応したらしいアレックスは瞼にキスを落とす。

「そんなにあの暗殺者が好きなのか？」

優しい口調が豹変した。

「えっ？」

ペロリと頬を舐める。

「コードネーム、ゼウス。本名、カイン。第14次世界大戦の発端。ジウ王国の王子を暗殺し国外に逃亡。現在、一部の国で指名手配中」

「……」

衝撃的過ぎて言葉も出ない。

不器用だが優しいカインがそんなことをするはずがない。

だが、初めてカインに会ったときを考えれば……。

「嘘じゃないよ」

未だに手を頬に当てたままだったが急に手を引かれ体を起こされたかと思うと手錠で拘束されているネスの腕を首にかけた。

そして口を塞がれた。獣のように貪るキスだ。

歯をなぞり、舌を絡める。

「はんっ……んっ」

湿った音と声が響く。

口の端から二つの液が混ざりあつた透明の液体が流れる。

片手でブラウスの下に手を入れて胸を形に沿って撫でる。

「ふっ……っ！」

抵抗しようにも腰に手を当て逃げないようにしてある。

そして、胸にある突起を親指と人差し指で弄る。

「いつ……」

変な刺激が頭に響いた。

そこでやつと口を離されたかと思うと彼は腰から手を放し、スカートを片手で脱がしはじめた。

気が付いたときにはもう手遅れで憐れもない姿にされた。

「白色も悪くないね」

「…あっ」

突起を親指の腹だけで転がす。そして、両手で弄り始めた。

「や、あ……っ！」

アレックスは服をたくし上げ、口に赤く熟した突起を口に含んだ。

「ひっ……う！」

「感じてる」

歯が当たるたびに体が弧を描く。羞恥で顔が真っ赤になる。

「ヤバ……」

舌なめずりする姿が恐ろしくなった。

両手を腰にゆっくりと滑り落とす。

「きちんと食べてる？こんなところに入れたら骨が折れそうだ」

マッサージをするように大きな手で撫でる。

「あの時、無理にでもやればよかった」

につこりと無邪気な顔で笑う。その時、ガチャリと足枷が外された。

アレックスはネスをベッドに沈ませた。

履いている下着の中に手を入れて両手で尻を揉む。

「や…めっ！」

そして、手を中心部に触れようとする。

その瞬間、風を裂く音がした。裂く音の原因となった六本のナイフを素早く避けた。

「そこにいるんですよ」

口調は優しいがドスの効いた声だ。

天井に吊り下げられたシャンデリアから黒い塊が降ってきた。

「お前は凄いな、今まで一緒にいて欲情しないなんて。」

彼はネスを離すどころか強く抱き締めた。

力が抜けて体が動かないためこちらからも抱きついているように見える。

黒い影が音もなく近付いて来た。

「離せ」

怒りのこもった声で反応が返ってくる。

黒い影はカインだ。声だけで分かる。

でも何故こんなところにいるのかが分からない。

とりあえずカインに近付こうと必死に体を動かすがアレックスが許してくれない。

「か……いん……」

カインがその声に反応した。だが、険しい顔がますます険しくなる。

「……なんて顔してんだ」

「…っ」

「可愛いでしょ？」

鏡が無いので確認が出来ないが余程変な顔をしているらしい。

「殺す」

カインはナイフを引き抜いた。

アレックスはつまらなそうに息を吐く。

「お前に殺されるのは勘弁。あ、ネスなら大歓迎だけどね」

顎を捕まれキスが降ってくる。逃げても追ってくる舌に翻弄される。
が直ぐに解放された。

「ネスに当たるだろう」

「当たらない」

「自信家だな」

ナイフが壁に突き刺さっている。

「……面白くない。今日のところは退散してあげるよ」

ネスを解放し手錠も外す。

両手を上げてヒラヒラと振った。降参のポーズだ。

だが顔は決して笑ってない。

カインはネスにすぐさま駆け寄る。

無言のままシートを体に巻き付けさせた。

余裕の顔を一睨みするとネスを抱えて窓から飛び出た。

その際、アレックスの口元が見えた。

”待ってるから”

そう言ったように見えた。

道中無言のまま家に着くと問答無用で風呂場に押し込められた。

風呂から上がりリビングに行くとき椅子に腰をかけたカインがこちらをじっと見ている。

何から話せばいいか考えているようだ。

「……アレックスが言っていたことは本当ですか？」

率直過ぎたかと思ったが彼には遠回しが効かないので丁度いい。

「……ああ。間違いない」

迷うことなくはっきりと耳に届いた。

耳鳴りがする。だんだんカインが遠くにいるように感じてる。

——暗殺者。

「そう……ですか」

また知らないところで何かが起こっていた。

「申し訳ない。だが……」

息が苦しい。

「知りません」

「は？」

「そんな人知りません。私が知っているカインさんは口数が少なくて無愛想で……」

彼は目を大きく見開き椅子から立ち上がる。

「触れてもいいか？」

動揺している彼に頷く。

「……すまない。……ありがとう」

温かく大きな体に抱擁される。それは壊れ物を扱うように優しくかつた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

S 1 終わりの鐘が鳴り、天使の足跡が響く

注意：今回のお話はカイン視点です。

＝
＝
＝
＝
＝

信用を得て、地位も得て、技を得て全て……準備が終わったときジ
ウ王国の王子を暗殺した。

だが、それらは仕組まれたことであつた。レールの上を走る汽車の
ように。

そのせいで戦争になり多くの人が消えていった。

もう国にすることが困難になり国外に逃亡したが証拠となるカイン
を消すために元の仲間が追っている。

暗殺者が暗殺者を殺すという皮肉。
思わず鼻で笑ってしまった。

逃亡する前に祝い酒を浴びていたせいか声がでない。
もしかしたら、酒の中に毒が入っていたかもしれない。

もう、そんなことはどうでもいい。

深い森の奥で名前を呼ぶ声が聞こえる。

「おい、ゼウス出てこいよ」

ゼウスというのはカインのコードネームでもあり、束縛される鎖のようなものだ。

これもどうでもいい。

「……」

そっと木の陰から姿を表してやった。

多くの命を奪ってきたツケを返す時だ。

——殺してくれ。

——全てを闇の中に葬り去れ。

カインは無表情で元の仲間を見た。決していい仲間だと思ったことはない。

「逃げるのはやめて殺されに行くのか？」

下品な笑い声が暗い森の中で木霊する。

「先に言っておくが俺達はな、天国にいけねえし地獄にもいけねえ。行き着くところは一体どこだか知ってるか？」

「……」

「ヘドロの棺桶だよ。意味が分かるかああああ！！？」

男が叫びながらナイフを翳す。避ける気もないのでそのまま受け入れた。

何度も何度もナイフが肉を裂く。

そして額に人差し指を置かれ地面に倒された。

冷たい雪が肌を麻痺させる。

ヒューヒューと息が鳴り口から地面に赤い花を咲かせた。

横たわったカインの頭を汚いブーツで転がす。

「お前にはヘドロの棺桶はもったいねえ、狼の餌にしてやるよお？
ありがたく思え？」

そのブーツで頭を思いつきり蹴られた。下品な笑い声と共に意識を手放してしまった。

どのぐらい時間がたったのだろうか少しだけ意識を取り戻した。いや、天使が迎えに来てくれたのかもしれない。

暖かい天使の手が冷たい肌に触れる。びくつと天使の手が動揺した。

——せめて仕事をしていけよな

そう恨んだとき、瞼が重くなり、また意識を失った。

ごそごそと己の胸の上で何かが動いている。鬱陶しそくに目を開く。

見てみるとそこには一人の女がいた。

生きている確認をしているのか鼓動の音を聞いている。

声を出そうと思ったが出ない。

仕方がないので彼女の気が済むまで待った。

ほっとした面持で離れるとカインの顔を見て彼女の表情が凍りついた。

彼女の目は美しい琥珀色でそれに見合った髪の毛は長く腰まである。癖毛なのがまたいい。

おどおどする彼女をじっと見た。別に睨んでいるわけじゃない。

「お、おはようございます」

声は鈴が転がったように美しい。

それに反応しようとしたがやはり声が出ない。

とりあえずそのことを伝えるのが礼儀だろうと思いゆっくりと首を振った。

流石にそれだけでは分からないのか彼女はコテンと首をかしげた。

仕方がないので凍傷となっている左手を無理やり動かした。そして喉に触れる。

彼女は悟ったのか少し落ち込んだ。表情が豊かな女だ。

「……声が出ない？」

やっと理解してくてたので、小さく息を吐いた。

「そうですか…取りあえず、薬を飲んで下さい」

薬と言われピクリとする。手に薬が置かれた。

彼女には悪いがまた毒に当たるのはごめんだ。

じつと女を疑う。

「毒なんて入っていません。ただの痛み止めです」

前に騙されたので疑い癖がついてしまった。疑うのは決して悪くない。

ペロリと薬の端を舐める。

『……どうやら彼女のいう事は正しいな』

この味は知っている。ただの痛み止めだ。
カインは直ぐに飲んだ。

そして、疑問に思ったことを彼女に示した。

「私？」

またもやびくつとされた。

確かどこかにこんな動物がいたはずだ。

「私はエルネスタ。ネスって呼んで下さい」

この出会いが己にとって掛け替えのないものになるとは想像してなかった。

To Be Continued...

08 籠の中、沼の世界

朝早く起きたが気だるい。

昨日のことが余りにも重すぎたせいだ。

昔、一緒に過ごしてきたアレックスはカースル王国の王になっていた。

しかも彼の親にあたるグローリーを殺してまで。

それが1つ。

もう1つはカインが暗殺者だったということ。

第14次世界大戦の発端となったジウ王国の幼き王子を殺した張本人。

それが2つ目。

3つ目はアレックスにブレアという弟がいたこと。

しかも人肉嗜食者で奇術(?)を使っていた変わり者。

考えてもなにも変わらない。

唸りつつベッドから降りようとしたとき、何かが落ちた。

床を見るとブレアから無理やり付けられたブレスレットが転がっている。

そして、それはみるみるうちに霧に変わっていき消えていった。

「……」

実は少し愛着が湧いていた。そんなことはどうでもいいが。

複雑な心境の中、一階に降りて行く。

今日は仕事かーと鬱になりながら準備をしていたらふと気が付いた。

「……アレックスって王様だからお城にいる…よね？」

顔が青ざめていく。

昨日の出来事がフラッシュバックした。

顔がみるみるうちに青色から赤色へなっていくのが自分でも実感で
きた。

「今度こそお嫁に行けない……っ」

しかし、自分は庭の掃除係だから会うこともないだろうと頭に訴え
かけた。

いや、会わないように極力注意して……。

「どうかしたのか？」

「わっ！」

後ろからいきなり話かけられる。

いい加減、気配を消すのをやめてほしいが彼にとっては治せない癖であつた。

「カインさん、どうしましょう」

「何が？」

「仕事……」

「……」

カインは目を細め、すっごい嫌そうな顔をした。

「そんなもの辞めたらどうだ」

それもそうだ。

それに金銭的にも落ち着いてきたし丁度いい機会かもしれない。

「……そうですね。早速、婦長に相談してきます」

「そうなの……残念だわ……」

婦長は残念そうに、しょんぼりしている。
罪悪感が心の中に積もるが気にしないことにした。

「それでこれからどうするの？」

「今さっき、紹介されたんですけど店の売り子をやるうかと」

「そう………気が向いたらまたいらっしやい、場所空けとくから」

につこりと笑うと手を差し伸べてきた。
ネスはそれを握り返す。

「はい、ありがとうございます。短期間でしたがお世話になりました」

使用人室を出て城の外に向かう。

外に待機していたカインが出迎えてくれた。

「意外とあっけなかった……」

「そうか」

目を合わせている間、無表情だったが逸らした瞬間に満足そうな顔をした。

そのとき、ほんの一瞬だったがカインの瞳が濁った色に見えた。

そんなネスを無視してこの国の中で大きな市場に向かった。

実は未だに国の中をあまり把握していない。
どうやら多くの商人が行きかう場所らしい。

カインの後ろ姿を見ながらついて行く。

さつきからどこからともなく見られている気がして仕方がない。
自意識過剰なのかもしれない。

「ここだ」

急に立ち止まったためぶつかりそうになる。

指を指している方向に顔を向けるとそこには雑貨屋があった。
ぱっと見は普通の店だが中に入ると凄まじかった。

――汚い。

陳列は雑で統一性が見えない。
面白そうな物が転がっていたが埃まみれだ。

「おっさん！来たぞ！」

カウンターに置いてあるベルを遠慮なくガランガランと鳴らす。

すると奥からのっそりと厳つい坊主頭の大男が出てきた。

いや、厳ついレベルじゃない怖かった。

ゴツくて、傷だらけて……。

なるべく関わりを持ちたくない雰囲気の人だった。

「よう！カイン！」

「前に売り子を探していただろう？連れてきた」

「おおお！よく覚えていたな！！がははははっ！」

豪快な笑い方をするおじさんだ。

なんでこんな人とカインが知り合いになれたのか少し不思議になる。
タイプが違いすぎる。

「……は、初めまして、エルネスタです、ネスって呼んでください」

「俺はアルだ！よろしくな、ネス！」

「わっ」

握手をすると手を強く握り思いつきり振ってきた。

全身がガクガク揺れる。

「おい」

「おっとしまった！！がははははっ！！」

多少不安に感じた。

9時から開店するので間に合う様に店に向かう。

「おはようございますー」

裏口からこっそり入る。

床には箱に入った商品が積まれてあった。
倒さないように避けながらアルを探す。

すると、箱の中からのっそりと巨体が出てきた。

「よー！おはようさん！」

アルの巨体が当たったのか、がらがらと音を立てながら商品が転がっていった。

その時、頭の中で何かが切れた。

「……………掃除します」

アルはその言葉にビクツとする。

彼にとって掃除は苦手らしい。店を見ただけで感じたが。

ネスはお構い無くホウキと雑巾を掴んだ。

掃除をしながら店番をやることは苦痛ではないしむしろ座っているだけだと寝てしまいそうだ。

雑巾で棚に付いた汚れを落としてゆく。

その間、窓の外を歩いている通行人からチラチラと視線を感じた。

気になって顔を上げると直ぐに視線を戻される。

『髪をまとめたのがおかしいのかな？』

不安に思いピンを外し、髪をまとめ直す。

『よし！』

さつきよりは綺麗にまとまった気がする。

木製のバケツを持ち上げ、中に入っている水を外の石畳にまいた。
灰色に濁った水が染み込んでゆく。

店に戻りカウンターに設置された椅子に座った。

こうして見ると大分綺麗になったことが実感できた。

相変わらず物が溢れているが。

その時、店の扉が開いた。

カラン、カラン

「いらっしゃいませ」

中に入ってきたのは品の良さそうな老婆だった。

「こんにちは、ロウソクあるかしら？」

「はい、こちらです」

椅子から立ち上がり商品のあるところまで導く。

老婆はロウソクを一本手に取り見ていた。

ここにはロウソク一本でも様々な種類がある。

花の形に削った物や植物をロウソクに張り付けたもの、しまいには動物の頭蓋骨にロウを詰めたものさえ売っている。

「これを一箱下さいな」

「はい、分かりました」

紙袋に商品を入れて、老婆からお金を受けとる。

老婆はありがとう一言だけ言うと店から出ていった。

彼女が出ていった後、ぽつぽつ人が入って来はじめた。

「洋紙はあるか？」

「こちらです」

「裁縫針はあるかしら？」

「こちらです」

掃除をしたため場所をなんとなく覚えていたのが役に立った。

何時間経っただろうか、外を見たときいつの間にか日が暮れた。

「今日はもう店仕舞いだからあがっていいぞ！」

アルがひょっこり裏から顔を出してきた。

「はい、戸締まりしましょうか？」

「おう！宜しく頼むわ！」

ネスはドアのプレートを準備中に変えて鍵をかける。
そして窓の雨戸を閉めた。

丁度裏に入った時、カインがいた。

「無愛想なオウジサマが迎えに来てらっしゃいますわ、オジヨーサ
マ？」

笑いを堪えながらからかわれた。

「…黙れ」

それを冷静に対処しアルに鉄拳を与える。

「痛っ！」

「帰るぞ」

痛がつているアルを放置し裏口から出ていってしまった。

「大丈夫ですか？」

「あいたたた…ほら、早く行ってやれ」

「それじゃ…お疲れ様でした」

気にはなるものの本人は大丈夫だというので出ていった。

「カインさん、食事が整いました」
「ああ」

ドスッ

重いものを机に落とした音がした。

目の前に大きな袋を置かれている。

「……開けてもいいですか？」

彼が薄く頷くのを確認した後、袋を開けた。

「な…、なになっ!？」

袋の中には大量の金貨と銀貨が入っていた。

「……」

正面には腕を組んで様子を伺っているカインがいた。

「…これ、どうしたのですか？」

「今までの家賃だか」

「いえ、いえ、いえ!多すぎます!あ、そういう意味ではなく……」

初めて大金を見たことに動揺してしまった。
彼がなぜこんなにも大量の金貨を持っていることを聞こうとしたは

ずなのに相変わらず会話が微妙に噛み合わない。

「賞金」

「は？」

単語だけで会話が通じるほど熟年者ではない。

「言いくいが……狩人^{ハンター}の仕事をしていた」

狩人という言葉に体が揺れる。

金さえ積みめば何でもする者。

いい思い出がない。

「そうなんですか…ありがとうございます、明日何か美味しいものでも買ってきますね！」

狩人は全ての人が悪い人とは限らない。

偏見なんて最悪だ。

少なくともカインはいい人だ。

「ああ」

そんな彼は薄く微笑んだ。

ふと疑問が浮かぶ。

「あの、いつから狩人をしていたのですか？」

「声が戻る少し前ぐらい」

そういえば、たまに家にいなかったことがあった。

「……あ、食事が冷めるので食べませんか？」

「それもそうだな」

ネスはチラリと窓の外を見る。

外には月夜草が咲いていた。

それは、本格的に暖かくなる前触れだった。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113w/>

SHADOW

2011年8月26日08時54分発行